

第3章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 大分

1. シンポジウムの概要

テ ー マ：「地域ぐるみの子育て支援活動のあり方」

日 時：平成 18 年 1 月 28 日（土） 10 時～14 時 50 分

場 所：「はさま未来館」（大分県由布市挾間町）

参加人数：140 人

開催目的： このシンポジウムは、地域の住民参加による子育て支援活動を活発にするために、地域の人々を巻き込みながら実践している活動の報告を交えながら、地域住民参加型の子育て支援活動の実情、課題及びその克服に向けた工夫などを話し合う。

タイムスケジュール

10：00～10：20 こどもコーラス 学楽多塾

10：20～10：35 開会行事

10：35～11：50 基調講演「地域ぐるみの子育て支援活動の重要性」

講 師：高田 悦也（子ども支援共同プランナー「塵劫社」代表 / 九州大谷短期大学非常勤講師）

11：50～12：50 昼食・休憩

12：50～13：40 事例発表

「つるおか子どもの家」（大分県佐伯市）

報告者：富高 国子（「つるおか子どもの家」代表）

「はさま地域子ども教室『学楽多塾』（大分県由布市挾間町）

報告者：黒田 美保（大分県由布市挾間公民館 / はさま地域子ども教室「学楽多塾」運営事務局）

13：40～14：50 パネルディスカッション

テ ー マ：「地域ぐるみの子育て支援活動のあり方」

パネラー：

高田 悦也（子ども支援共同プランナー「塵劫社」代表）

富高 国子（「つるおか子どもの家」代表）

黒田 美保（はさま地域子ども教室「学楽多塾」運営事務局）

コーディネーター：

岡田 正彦（大分大学生涯学習教育研究センター 助教授）

14：50 閉会



2. 基調講演の主な内容

子育て支援共同プランナーとして、「遊びのフリースペースてらこやきっど」（佐賀県三養基郡基山町）の取り組みや「アンビシャス運動」（福岡県）の推進をしている高田悦也さんに「地域ぐるみの子育て支援活動の重要性」について講演していただいた。主な内容は、以下の通りである。

今取り組んでいる、子どものための地域活動を振り返ってみる
一生懸命子どものためにやっても、たたかれたり、文句を言われたりする。地域活動を継続していくには、このことを越えないといけない。そこで重要になるのは、何のために、ここで私たちがやっているのかである。子どもたちが笑顔になるためである。

では、現在取り組まれている活動は、子どもたちを笑顔にさせているのであろうか。PTA、子ども会、育成会など、地域の大人たちが忙しい中、子どもたちのために活動をしている。しかし、子どもたちは「おもしろくないから、行かない」と言う。大人は、子どものためにやっているつもりだが、子どもはやらされている感覚である。なぜそうなったのか。やっていることの意味を見失っているのではないか。もう一度、何のために活動しているのか（＝活動のビジョン）を考えてみる必要がある。

地域で子どもの生きる力を育むこと（＝「養生」）の重要性について

何のための活動か。それは、「子どもたちが生まれてきてよかった、生きていてよかった」と思えるようにするためである。そのために、子どもたちは生きる力、自分で人生を切り開いていけるような力を身につける必要がある。生きる力を身につけるには、「教育」と「養生」の2つの方法がある。「教育」は、「未来」を生きる力を育むことである。教育を担うのは学校である。学校は子どもたちに、一人前の大人になるために、読み・書き・計算と、大人になって必要になる知恵や力を教える。それに対して、「養生」は、いのちを養い、「現在」を生きる力を育むことである。教育は、「未来のために」ということで、子どもたちの「今」を犠牲にしていく。しかし、子どもたちが明日を期待し、希望を持つためには、毎日楽しいことを見つける力が必要になる。養生は、教育の土台となる。そして、これを担うのは、家庭と地域である。特に、家庭で「現在」を生きる力を養うことが難しくなっている。昨今、地域でそれを積極的に行うことが重要になってきている。

子どもたちが生きる力を身につけるための地域の課題について

子どもたちの「現在」を生きる力を養うための地域の課題は、居場所づくりと大人づくりである。居場所は、子どもたちがのびのびと自分自身でいられる場所であり、大人の管理や監視が届かない場所である。そのためには、地域の様々な人たちが関わり、こうした「子どもたちの居場所が必要だね」という認識をつくっていくことが大切になる。それは、活動を通じて、大人自身が生き生きとし、互いに助け合うような地域をつくっていくことでもある。もうひとつは、「子どもの喜び（苦しみ）を自分の喜び（痛み）にできる」大人をつくることである。子どもにいろいろ言わず、子どもたちの「今」生きる力を大切にし、懐深い大人をつくることである。子どもたちの居場所に関わる大人は、子どもたちが笑顔になれる、来てよかった、おもしろかった、また来たいと思えるものをつくっていくことができるようにすることが重要である。また、こうした活動にとって大きな力となるのが高齢者の関わりであることが、最後に強調された。

3. 事例報告の主な内容

「つるおか子どもの家」

まず、「つるおか子どもの家」代表である富高国子さんから、子どもたちの遊び場である「子どもの家」ができあがるまでの経緯を中心に活動報告がなされた。16年前に、母親クラ



ブで知り合ったお母さん同士が、「子どもたちが安全に遊べる場所がない」という問題認識から、遊び場をつくる運動を始めた。この遊び場はできあがるまでに3年かけている。このとき、「子どもたちのため」と言う前に、まずは地域の大人同士がつながることが重要であることに気づいたという。そこで、「子どもの家」づくりへの協力を得るために、試行錯誤しながら、区長や民生委員、老人クラブなどの人たちとつながっていった。そして、この3年間を通じてできた地域の大人同士のつながりが、今の「子どもの家」の運営にとって欠かせないものとなっているという。子どもたちを通して、地域に暮らす様々な人たちとの出会いがあり、地域の発見につながっていると語られた。

はさま地域子ども教室「学楽多塾」

続いて、はさま地域子ども教室「学楽多塾」事務局の黒田美保さんから、町民情報室「未来クラブ」が中心に実施している子育て支援事業「学楽多塾」の活動報告がなされた。「学楽多塾」は、文部科学省による「子どもの居場所づくり」の一環である。学楽多塾では、小学校1年生から中学校3年生までが塾生になれ、塾生は13分類22教室から自分の行きたい教室を登録する。今年度の参加者数はのべ2000人を超えるという。これらの教室の講師依頼では、「未来クラブ」が作成した町内人材リストを活用している。また、講師の他に、子どもたちをサポートするボランティアスタッフが数多くいるという。今後の活動の課題として、中高校生のボランティアを増やすことと、子どもたちが通いやすいように、自治区公民館で活動を展開できる体制を整えていくことを話されていた。

4. パネルディスカッションの主な内容

パネルディスカッションでは、フロアーからの質問の他に、岡田正彦先生のコーディネートのもと、パネラーのそれぞれの活動経験を踏まえ、子どもたちを受け入れるときの工夫・心がけ、子育て支援に地域で取り組む際の心がけ



についての意見を伺うことができた。ここでは、それぞれ簡単に紹介をする。

まず、様々な子どもたちを受け入れるときの工夫・心がけていることについてであるが、富高さんからは、次のよう発言があった。子どもたちは日々の、地域の大人とのつきあいの中で育っていく。そこで、「子どもの家」では、そこにいる大人を先生とは呼ばず、おばちゃん、おじちゃん、おばあちゃん、おじいちゃんと呼び、大人は子どもたちの名前を呼び、「好きだよ、あなたが」という視線とオーラを送るようにしているという。障害のある子どもたちは、「子どもの家」に毎年3人以上来ており、他の子どもと一緒に遊んでいる。子どもたちは、障害のある子どもや大人と一緒に過ごすことで、何が自分にできるのか、自分を振り返るようになる。さらに、富高さんは「誰もハンディキャップを持っていると考えるので」、そこに垣根のないことが楽しい、暮らしやすい地域であると話す。

黒田さんからは、子どもたちにあそこ（「学楽多塾」）に行きたいなと思ってもらうために、チラシをカラフルにするとか、開塾式のときにいちご狩りを行うとか、学校の規模や子どもの人数に合わせて、やり方を変えるなどの工夫をしているという発言があった。

高田さんからは、「遊びのフリースペースでらこやきっど」や「アンビシャス運動」の活動を踏まえ、子どもたちが生き生き過ごすための工夫として、思いっきり遊べる場にすること、子どもたちがやらずにはおられないという場にすることがあげられた。そのために、やりたいと思う人、前向きに楽しくやろうという人が3人集まれば、子どもの居場所づくりをする

ことができると話す。「てらこやきっど」では、障害のある子どもは、他の子どもたちにちょっとかけたり、いじめられたりするなど、当たり前のように過ごしている。「アンビシャス運動」では、隣に困っている子どもがいるときには、地域の中で声を掛け合い、サポートしていくようにしているという。

子育て支援に地域で取り組んでいく際の心がけでは、「マイナスが逆にチャンスになる」という意見が出された。何もないから何かしないといけないと思うようになり、理解してもらえないから、理解してもらえるように頑張るようになる。それにより、地域の人々がつながっていく。いろいろな問題があったら、もっと良い地域にしていくチャンスと捉えることや、できることに目を向けていくことの重要性が言われた。また、多世代が出会い、交流することで、いろいろな経験を積むことができる。そして、子どもが楽しいことは大人も楽しいし、子どもが元気なところは大人も元気であるという認識については、パネラーの意見が一致していた。最後に、富高さんから、子育て支援を地域で取り組んでいく際に、子育ての当事者を抜かさないこと、おみやげや宿題などで、親にメッセージを送り、親子関係がもっとうまくいけるように心がけていくことの大事さが伝えられた。

5. シンポジウムの感想

参加者は、基調講演、活動報告の内容に共感・共鳴したようである。例えば、「様々な世代の交流が実現されていてすばしかったです。大人の人材育成の必要性を痛感しました」「大人の生きていて楽しかったという気持ちが不足していることに気がきました」「子供の笑顔、子供の喜びを自分のものとして感じることの出来る人こそ、支援活動に参加できるということ、その通りだと思いました」といった感想が寄せられている。このシンポジウムは、既に活動をしている人たちにとって、自らの活動を振り返るきっかけになったり、活動のヒントになったりしたのではないかと思う。

また、「先ず隣の子どもの名前を覚えてゆくところから始め、近所、地域の子どもに声をかけるところから始めて行こうと思いました」「自分の子育ては終わったけど、自分が元気でいられる間は何らかの形で協力していきたいと思いました」というように、身近なところからやってみようという気持ちになって、参加者は帰っていかれたようである。こうしたアクションをいただけたことは、企画委員としてとても嬉しいことである。

地域における人間関係が希薄化してきている中で、子育て支援の活動を通じて、地域の人々がつながっていく。そして、そのつながりを活かして、さらに子どもから高齢者まで、様々な人々が出会い、交流できる場をつくる。シンポジウムを通じて、これが、子どもを育てることと同時に、地域をつくっていくことにつながるのだな、としみじみ感じた。

付記：最後になりましたが、講師の高田さん、活動報告者の富高さんと黒田さん、コーディネーターの岡田先生、そして、大分県生活学校運動推進協議会の小野会長をはじめ、挟間生活学校の皆様のご尽力により、シンポジウムを成功のもと終わらせることができました。企画委員のひとりとして、心より感謝致します。この場をかりて、御礼を申し上げます。

(渡辺恵)

